

教育心理学の視点から「高機能自閉症」を考える

On “High Functioning Autism”
from Perspective of Educational Psychology.

鶴田一郎

Ichiro TSURUTA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』

“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”

ISSN:1884-9482

第9号 抜刷

Off Print of the 9th Edition

広島国際大学 心理科学部 教職教室

Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2017年12月

December, 2017

教育心理学の視点から「高機能自閉症」を考える

広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 鶴田 一郎

要旨：発達障害は、大きく知的障害のグループと自閉症を中核とするグループに分けられる。後者の自閉症を中核とするグループの3/4は知的障害を伴うタイプである。これを単に「自閉症」と呼んだり、提唱者の名前をつけてカナ型自閉症と呼んだりする。一方、自閉症を中核とするグループの残りの1/4は知的障害を伴わない、^{ある}或いは軽い知的障害があるタイプである。知的障害を伴うタイプの発達障害は、通常、特別支援学校(知的障害)や通常学校の特別支援学級(固定式)に所属しているため、一般の教師が担当になることは少ないが、通常学校の通常学級や小中の特別支援学級(通級式：通級指導教室)の担任で問題となるのは、知的障害を伴わない、^{ある}或いは軽い知的障害がある発達障害児である。具体的には、アスペルガー症候群、高機能自閉症、LD(学習障害)、ADHD(注意欠陥／多動性障害)などである。この内、本研究では自閉症を中核とするグループ、すなわち自閉症スペクトラムに焦点を当てる。なお、本稿では、自閉症スペクトラムの教育心理の内、特に「教育心理学」の視点から「高機能自閉症」に焦点を当てて、1. 高機能自閉症の概要 (1)「高機能自閉症」とは何か・(2)「高機能自閉症」に際立った特徴・(3)診断基準、2. ライフステージ別状態像 (1)乳幼児期(0歳から6歳くらいまで)・(2)学童期(6歳から12歳くらいまで)[学習の面][社会性の面]・(3)思春期・青年期(13歳から18歳くらいまで)・(4)成人期以降(18歳以降)を順次、検討・考察した。

はじめに—問題の所在—

通常学校(小学校・中学校・高等学校)の現場の教師と話していて、最近、例外なく話題に上るのが、発達障害のある児童・生徒のことについてである。それらの教師の人たちは、筆者に教育心理学の視点からの専門的アドバイスを求めてくる。それらをまとめると、発達障害に関して、①学校での支援の方法、②家庭への支援の方法、③家庭と学校の連携について、④学校外の支援について、になる。発達障害は、大きく知的障害のグループと自閉症を中核とするグループに分けられる。後者の自閉症を中核とするグループの3/4は知的障害を伴うタイプである。これを単に「自閉症」と呼んだり、提唱者の名前をつけてカナ型自閉症と呼んだりする。一方、自閉症を中核とするグループの残りの1/4は知的障害を伴わない、^{ある}或いは軽い知的障害があるタイプである。知的障害を伴うタイプの発達障害は、通常、特別支援学校(知的障害)や通常学校の特別支援学級(固定式)に所属しているため、一般の教師が担当になることは少ないが、通常学校の通常学級や小中の特別支援学級(通級式：通級指導教室)の担任で問題となるのは、知的障害を伴わない、^{ある}或いは軽い知的障害がある発達障害児である。具体的には、アスペルガー症候群、高機能自閉症、LD(学習障害)、ADHD(注意欠陥／多動性障害)などである。上の発達障害の内、本稿では「自閉症スペクトラムの教育心理」に焦点を当て、特に今回は紙幅の関係から、「高機能自閉症」について、検討・考察していきたい。

1. 高機能自閉症の概要

1.1 「高機能自閉症」とは何か

「高機能自閉症(High Functioning Autism：略称 HFA)」は、知能偏差値 70 以上(平均 100 からマイナス方向に 30 からプラス方向以上。但し、知能偏差値 70 は知的障害の有無の境界域)である。ただし、研究者により、症状論を明確にするために知能偏差値 70 から 84 の境界的知能群を除外して、知能偏差値 85 以上(正常域・知的障害なし)で、今までに述べてきた自閉症スペクトラムに共通する「三つ組みの障害」(社会性の障害・コミュニケーションの障害・想像力の障害)が存在するケースを HFA と呼ぶ人もある。私もこの立場から本稿を書いていきたい。知能偏差値を 85 以上と規定すると、かつて(1990 年代)は自閉症スペクトル全体の約 5%が HFA であると言われているが、HFA は増加傾向にあり、2000 年代では自閉症スペクトラムの約 20%が HFA という調査もある。したがって最近では、日本の子ども全体の少なくとも 250 人から 300 人に 1 人以上、HFA は存在すると考えられている。その周辺領域の子ども達を含めると、40 人学級で考えると、おおよそ 3 クラスから 4 クラスに 1 名位は、HFA とその周辺領域にいる子ども達がいることになる。HFA は、平成 15 年 3 月の特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」では次のように定義されている(尾崎・尾崎・草野 2005)。

高機能自閉症とは、3 歳位までに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいう。また、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

つまり端的に言えば、HFA は「知的障害がない自閉症」ということになる。ただし、自閉症スペクトラムに共通の三つの特徴(三つ組みの障害＝社会性の障害、コミュニケーションの障害・想像力の障害)はもっている。

1.2 「高機能自閉症」に際立った特徴

それでは高機能自閉症(HFA)に際立った特徴は何だろうか。次に列挙してみる。

- 「知的障害」は、なし、もしくは普通以上に高い知能を有する。
- 「言葉・会話」は、限定的で続かない。
- 「他者への関心」は、薄い。注意を促せば一応斜に顔を向けるが、機械的で、顔が正面を向かない。
- 「相手の意図」は、気付かない。
- 「友達関係」は、概念理解が難しい。「友達」という概念が不明確で、気持ちを共有する関係というのが理解しにくい。したがって、彼らにとって、友達と一緒に遊ぶとは、ただ一緒に場所にいるだけで何もかかわらないことが少なくない。
- 「問題解決の方法」は、ワンパターン。

以上から HFA の特徴をまとめると、知的障害はない、もしくは普通以上に高い知能を有するが、「自らはもどめることが乏しい」自閉症と言える。

1.3 診断基準

HFAの「判断基準(診断基準)」は、平成15年3月の特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」では次のように暫定的に規定されている(尾崎・尾崎・草野 2005)。

以下の基準に該当する場合は、教育的、心理学的、医学的な観点からの詳細な調査が必要である。

1.知的発達の遅れが認められないこと。以下の項目に多く該当する

○人への反応やかかわりの乏しさ、社会的関係形成の困難さ

- ・目と目で見つめ合う、身振りなどの多彩な非言語的な行動が困難である。・同年齢の仲間関係をつくるのが困難である。
- ・楽しい気持ちを他人と共有することや気持ちでの交流が困難である。

【高機能自閉症における具体例】

- ・友達と仲良くしたいという気持ちはあるけれど、友達関係をうまく築けない。・友達のそばにはいるが、一人で遊んでいる。
- ・球技やゲームをする時、仲間と協力してプレーすることが考えられない。
- ・いろいろな話をすが、その時の状況や相手の感情、立場を理解しない。・共感を得ることが難しい。
- ・周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言うてしまう。

○言葉の発達の遅れ

- ・話し言葉の遅れがあり、身振りなどにより補おうとしない。・他人と会話を開始し継続する能力に明らかな困難性がある。
- ・常同的で反復的な言葉の使用または独特な言語がある。
- ・その年齢に相応した、変化に富んだ自発的なごっこ遊びや社会性のある物まね遊びができない。

【高機能自閉症における具体例】

- ・含みのある言葉の本当の意味が分からず、表面的に言葉通りに受けとめてしまうことがある。
- ・会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかったりすることがある。

○興味や関心が狭く特定のものにこだわること

- ・強いこだわりがあり、限定された興味だけに熱中する。・特定の習慣や手順にかたくなにこだわる。
- ・反復的な変わった行動(例えば、手や指をばたばたさせるなど)をする。・物の一部に持続して熱中する。

【高機能自閉症における具体例】

- ・みんなから、「○○博士」「○○教授」と思われている(例：カレンダー博士)。
- ・他の子どもは興味がないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている。
- ・空想の世界(ファンタジー)に遊ぶことがあり、現実との切り替えが難しい場合がある。
- ・特定の分野の知識を蓄えているが、丸暗記であり、意味をきちんとは理解していない。
- ・とても得意なことがある一方で、極端に苦手なものがある。
- ・ある行動や考えに強くこだわることによって、簡単な日常の活動ができなくなることがある。
- ・自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる。

○その他の高機能自閉症における特徴

- ・常識的な判断が難しいことがある。・動作やジェスチャーがぎこちない。

2.社会生活や学校生活に不応が認められること。

2. ライフステージ別の状態像

2.1 乳幼児期(0歳から6歳くらいまで)

石川(2002)は、乳幼児期に高機能自閉症(HFA)を疑わせた子どもの養育者側の訴えを年齢別に次のようにまとめている(表1)。

表1 乳幼児期に高機能自閉症(HFA)を疑わせた子どもの養育者側の訴え(石川 2002 を参照して作成)

	特徴	具体的内容
乳児期	育てやすさ	寝てばかりいる おとなしい 親の邪魔をしないで一人で遊んでいた
	育てにくさ	一日中泣いていた ひどい夜泣きをした ちっとも寝ない
1歳代	愛着行動の欠如	人見知りがあったくない 外で迷子になってしまう 一人でも平気
	愛着行動の異常	人見知りがひどい 母親べったりで、父親になつかない
	言葉理解の遅れ	呼んでも知らん顔をされる 耳が聞こえないのかが心配 言葉の理解がない
2歳代	不安	特定の物を非常に怖がる 病院や理髪店へ、怖がって入れない 初めての物・場所を怖がる
	マイペースさ	思う通りにならないと、すごく怒る 言い聞かせても分からない 人の言うことを聞かない
	こだわり	妙に神経質
	身辺自立の遅れ	トイレに行くのを拒否する ひどい偏食が出てきた 自分で食べようとし ない 排泄ができない
3歳代	対人関係の障害	友達に興味がない 子どもを怖がる 一人で遊んでいる 集団でやることを嫌がる
	生活習慣でのこだわり	同じ服しか着ない 靴下を絶対に脱いでしまう うんちをパンツの中でしかしない 偏食がなおらない
幼児期 (集団生活)	集団行動がとれない	教室にいないで、外に飛び出す
		行事に参加しない
		好きなことしかしない
		給食が食べられない
		昼寝ができない
		勝手な行動をする
	対人関係の障害	危ないことを平気でする
		何時も一人で遊んでいる
		理由なく、友達を噛んだり叩いたりする
		注意しても聞かない

石川(1999)によれば、上の表(表1)のように、乳児期は、非常に育てやすい子か、睡眠障害などのために大変育てにくい子であるかのどちらかになる傾向がある。1歳前後には、「まったく人見知りがない」か、反対に「人見知りがひどい」かである。中間が無く両極端である。また「行動の恒常性」(ある程度の時間、ある行動を、ある文脈の中で継続できる一貫性)が乏しい感じもある。例えば、人見知りが激しいのに、公園ではお母さんから離れて勝手にどこかに行ってしまうたりするケースもある。

3歳過ぎからは、友達関係についての問題が多くなるが、「中間が無く両極端」の傾向は続く。例えば、友達と遊ぼうとしない、友達に関心が無い場合があるかと思えば、その一方で、すぐに友達に手を出すという報告もある。少人数の慣れた子どもとは遊べるが、知らない子ども達がたくさんいる場面では、身体を硬くしてその場を動こうとしないという場合もある。身辺自立が完成する過程でも、一部に未完成な部分が残ったり、全然やろうとせず、無理にさせると激しく抵抗していたのに、ある日突然にできるようになったケースも少なからず報告されている。さらには、どんな場所にも物おじせずすぐに中に入っていく子どももいれば、初めての場所に入るのにひどく抵抗する子どももいる。

2.2 学童期(6歳から12歳くらいまで)

辻井(1999)では、高機能自閉症(HFA)の学童期の状態像の特徴として、「学習の面」「社会性の面」から次のような解説がされている。

2.2.1 学習の面

知的障害はなく、逆に知的には優秀な子どもも多い、高機能自閉症(HFA)の子ども達だが、その中には小学校入学より学業がうまく進まない子どももいる。それは、集中力がない、多動である、ということによるだけではなく、彼ら独特の理解の仕方のために学習困難になるケースもある。例えば、筆算をするのに数字を縦に書いてしまったり、横書きにも拘らず右側のページから読んでみたり、縦書きと横書きの混乱が見られる場合がある。

通常学級の40人クラスで授業を受ける場合、例えば「みんな、教科書を出しなさい」と先生がクラス全員に向かって出す指示に対して、彼らは自分にも向って出された指示であることを理解できない。ただし、先生が彼らの近くに行って直接指示を出せば指示に従える。したがって通常学級で担任の先生一人が教える場合は、高機能自閉症(HFA)の子どもの席は一番前の先生の近くがよいとされている。しかし、彼らは自分の興味のあることはどんどんするが、興味のないことはまったくやろうとはしない。もし先生から指示されたことが本人にとって興味のないことだったら、全然指示に従わないので、高機能自閉症(HFA)に関する知識がなければ、わがままな子・自分勝手な子とクラスの友達から思われて孤立するかもしれないし、また学習も進まない。

2.2.2 社会性の面

小学校入学と共に、学校や学級といった今までには体験しなかった大きな集団に入る高機能自閉症(HFA)の子ども達は、もともと集団場面での刺激の受け取りやすさを持っているために、時として迫害的な不安を呼び起こされることがある。また、他者とのつながりやかかわり方を十分に獲得してこなかった子どもの場合、「友達をつくり、皆と仲良くしましょう」「相手の気持ちを考えて、思

いやりの心をもって」という小学校側の教育目標を言われても、即座には理解できないこともある。一方、幼児期以降、就学前の療育を経験し、両親の十分な理解があつて、その後も一貫した療育を継続的に受けている子どもの場合、小学校の生活に慣れてしまえば、ぎこちなくであったとしても、楽しく学校生活を送っているケースもある。

2.3 思春期・青年期(13歳から18歳くらいまで)

堀(2002)では、高機能自閉症(HFA)の思春期・青年期の状態像の特徴として、特に「自己意識の面」から次のような解説がされている。

児童期にはいろいろな形で特に集団場面でのトラブルを起こしていた彼らも、適切な支援・療育が早期から実現されれば、10歳頃を境に、いくぶん安定した状態に落ち着くことがある。一番の課題であった対人関係、特に友達との関係も、「変わっているが、嫌味がなく面白い面もある」「基本的に真面目で正直だ」などと肯定的評価を受ける人もいる。特に集団場面で与えられた仕事をきちんとこなしたり、皆の意見を調整するなど、目覚しい成長を遂げる人もいる。

しかし、HFAにとって思春期・青年期は「試練の時代」と呼ばれるように、生活環境の変化が大きく、また先の見通しが立てにくい状況になるため、周りの人と歩調を合わせていくのが難しい時期でもある。例えば、友達との会話についていけず孤立したり、仲間はずれになったり、いじめの対象になる場合もある。

これらの差は、それまでの支援・療育のあり方が非常に大きく関係していると考えられているが、思春期・青年期の場合、特に「自己意識の面」からの理解が必要になってくる。

思春期・青年期は、障害の有無を問わず、どの青年にとっても、「自分は何者か」というアイデンティティの問題に悩む時代である。しかし、「私=私」つまりは「私は今までも・今も・これからも独自の存在である」という意識(アイデンティティ)が揺らぎ、不安定になる人もいる。特に高機能自閉症(HFA)の人たちは、児童期にはあまり感じなかった周囲との違和感を思春期・青年期になると感じ始める人もいる。自分と他者とを比較して、「自分は普通にやっているつもりなのに、君はおかしいと言われる」「自分自身、周りと調和していないように感じる」「人との共同作業が自分は苦手だ」など、自分と周りの人との違いを過度に意識するようになる人もいる。その克服に向けて努力しようとする人も出てくるが、その極端さのために却って周囲から拒絶されたり孤立したりすることも少なくない。

高機能自閉症(HFA)は基本的に知的障害がないので、単なるわがままな自分勝手な人と周囲から誤解されることが多く、周りの人とトラブルを起こしたり、いじめの対象になってしまったりすることもある(杉山 2005)。ただ、本人にもその自覚はあり、それが周囲との違和感を強めてしまう場合がある。児童期までに「うまくできない」が続くと、思春期以降、「自分は駄目なんだ」と自己否定意識が大きくなってしまふこともある。そのような子ども達は中学校から不登校になってしまったり、非行に走る人もいる。このような自己意識の観点から考えても、早期からの支援・療育を必要充分におこなうことが肝要であると考えられる。特に周囲の子ども達と適切に交わりながら本人の自己意識を高めるかかわりのあり方を養育者・療育者側も考えていかなければならない。

2.4 成人期以降(18歳以降)

高機能自閉症(HFA)の青年期以降の課題としては「社会参加の問題」が特に重要だが、ここでは杉山(1999)を参照して「就労をめぐる問題」について述べたい。

高機能自閉症(HFA)の就労の問題は、知的障害はなく、逆に知的には優秀な人が多い HFA の傾向から、比較的楽観的に捉えられてきた面があったが、現実には困難な面も多々あり、支援・療育の大切な課題の一つとなっている。高校や大学を卒業して就職できた人の中でも、途中で勤務先を辞めてしまう人も少なくない。また、就職試験の段階でつまづく人もある。それは彼らにとって学業成績やペーパー試験は問題が無いのだが、「面接」がネックになってしまうからである。面接で、例えば何度も同じ事を確認するなど、独特のこだわりのため相手に奇異な印象を与えてしまったり、就職マニュアル通りに棒読みで受け答えしてしまい、面接担当者を困惑させたりすることがある。ただし、そういう印象を与えていることに、人一倍過敏で緊張しやすい彼ら本人は気づいていない。

これまでの就労支援は、就労相談から始まり、就労能力評価、就労前訓練、職場適応指導などが中心だったが、発想の転換を求められている。つまり「訓練してから就労」というのではなく、「就労した場所で支援を」といった考え方になっている。この発想からアメリカでは「援助付き就労(グループ・個人)」が実践されているが、特に個人に対する援助付き就労ではジョブ・コーチと言われる就労支援の専門家が利用者と一緒に働きながら、徐々に援助を減らしていく実践が行われている。さらに高機能自閉症(HFA)の就労支援を行う際には、特に職場の同僚・上司に、これらの発達障害の概要を理解してもらうことも必要になってくる(梅永 2002)。

おわりに—まとめに代えて—

本稿では、自閉症スペクトラムの教育心理の内、高機能自閉症に焦点を当てて、1. 高機能自閉症の概要 (1)「高機能自閉症」とは何か・(2)「高機能自閉症」に際立った特徴・(3)診断基準、2. ライフステージ別状態像 (1)乳幼児期(0歳から6歳くらいまで)・(2)学童期(6歳から12歳くらいまで)[学習の面][社会性の面]・(3)思春期・青年期(13歳から18歳くらいまで)・(4)成人期以降(18歳以降)を順次、検討・考察した。なお、今後の課題だが、類似する二つの自閉症スペクトラム障害(アスペルガー症候群と高機能自閉症)を対照し、その異同を考察していきたいと考えている。

引用文献

- 堀美和子(2002)「アスペルガー症候群と高機能自閉症の青年期の特徴—青年期特有の課題とそのサポート」杉山登志郎(編)『アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート』学研、pp.42-49。
- 石川道子(1999)「発見・診断から早期療育へ」杉山登志郎・辻井正次(編)『高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症』ブレーン出版、pp.112-119。
- 石川道子(2002)「アスペルガー症候群と高機能自閉症の幼児期の特徴—幼児期に早期発見をするには」杉山登志郎(編)『アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート』学研、pp.25-33。

尾崎洋一郎・尾崎誠子・草野和子(2005)『高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその周辺の子どもたち—特性に対する対応を考える』同成社。

杉山登志郎(1999)「就労を巡って」杉山登志郎・辻井正次(編)『高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症』ブレーン出版、pp.170-178。

杉山登志郎(編)(2005)『アスペルガー症候群と高機能自閉症—青年期の社会性のために』学研。

辻井正次(1999)「学童期の問題—学校教育の問題」杉山登志郎・辻井正次(編)『高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症』ブレーン出版、p.138-161。

梅永雄二(2002)「職業援助(アメリカ・ノースカロライナ州との比較—今後に望まれる就労後の支援)」杉山登志郎(編)『アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート』学研、pp.50-56。

付 記

本稿の基礎には筆者の師である伊藤隆二先生(横浜市立大学名誉教授)による次の二つの著作があります。本稿など遥かに超えた深い省察が、そこにはあります。是非ご一読されることをお勧めします。付記して感謝申し上げます。

- 1) 伊藤隆二(1999)『人間形成の臨床教育心理学研究—「臨床の知」と事例研究を主題として』風間書房。
- 2) 伊藤隆二(2002)『続 人間形成の臨床教育心理学研究—愛と祈りの「人格共同体」を願って』風間書房。